生まれてここにいるから空の眼をしていない

作　佳　真下三月

小鳥（ことり）ちゃんが風邪をひいた。

そう言われても、私には何の感慨も無く、ただ、カフェオレを啜るだけだった。何かしら感じろと言う方が無茶というもので、私はその「小鳥ちゃん」のことを名前すら知らなかった。

「小鳥ちゃんて、誰」

素直に尋ねると、風子（ふうこ）は驚いて、オレンジジュースを飲むのをやめた。彼女の顔は、表情に合わせて、それらしく変化するので、話していて不安になることがない。

「小鳥ちゃん知らない？　有名じゃない。ああ、さっきみたいに忘れてるんじゃないの」

「あれは、偶然」

「オッフェ」

「忘れろ」

三時間目の授業が終わり、これで今日は家に帰っても良いのだけれど、なんだか体の内から暑くなるような日で、それを同じく感じていた風子が、珍しく、飲み物を買ってきてあげようと言い出した。いつもなら、自分が何か飲みたければ、まず私に持ちかけるのに。変なこともあると思ったけれど、たまには、そういう変なことが起こるものだと思って、何を買ってきて貰おうかと考えた。水のようなさっぱりしたもの、もいいけれど、甘いものが恋しい。浮かんだ。決まった。私は、すっかりカフェオレを飲む気分になっていたのだけれど、「フェ」しか思い出せなかった。そんな馬鹿なと、あまりの忘却具合に焦ったのだが、それを理性で落ち着けさせる。ちょっと冷静になると「オ」という文字が出てきた。フェオ。いや、オッフェだった。私の頭の中には、涼しげな水色のボウルに入ったそれが浮かんでいて、いや、白いのでもいい。とにかく、オッフェはそれを八割方、言い表していたので、私には合格点だった。けれどもその基準は、私だけのものだったので、風子には通用しなかった。当然のことながら。彼女と私は、大喜利みたいな遣り取りを数回繰り返して、漸く、カフェオレに辿り着き、風子は大笑いしながら自販機に向かった。学生が帰り始めて人気のなくなった教室で、私は何だか恥ずかしかった。

「忘れてもいいけど、どうかな。最近、そういうの多いからさ」

風子がからかうけれど、確かにその通りで言い返せない。このところ、どうも、言葉が崩壊しているような気がする。今まで、

収集して、意味づけて、几帳面に体系づけてきた語彙が、急速に、ばらばらになっていくような感覚。何か悪い虫に、頭の中の辞書を、滅茶苦茶に食い荒らされているような気分なのだった。浮かぶ言葉は穴埋め式で、回答には時間がかかってしまう。ときには、入れ替わっていたりする。新幹線は新・鮮・館（なぜか漢字は変換される）。エキストラはエストキラ。風子や友人たちは笑い飛ばしてくれるのでまだいい。場が場なら、無学を非難するような目を向けられてしまう。

「でも、小鳥ちゃんは本当に知らないから」

「有名なのに」

風子は意外そうに言って、缶をテーブルに置いた。

「そっか。何ていうか相変わらずだね」

周囲の人間に関して……、ということを風子は言いたいらしい。でも、知らないものは知らない。

「そんな顔しないでよ」

風子は笑った。

「どんな顔」

そう尋ねてから、私は、風子に何か言われる前に口を開いた。言い訳がましくなってしまった。

「だって、知らないことを話されると、不安になるでしょ」

飲み終わったカフェオレの缶を、手で潰す。

「ごめんね。でも、そんな深刻にならなくたっていいんだよ。ただね、何ていうのかな……なんか、一点集中型っていうかさ」

風子は、茶化すことで物事を緩和してみるのが得意なのだけれど、ときどき、知ってか知らずか核心に触れるような発言をする。そうそう、私の世界は狭い。私は、見たいものしか見ていない。だから、その「小鳥ちゃん」も、私の興味の外にいたので、こうして風子が語ることがなければ、永遠に知らずにいただろう。そして、大抵、外部から受け取る情報は、余計なものだ。

「それで？」

話を変えたくて、促すと、風子は思い出して、元の勢いに戻った。

「ああ、小鳥ちゃんだよ」

風子の話だと、その小鳥ちゃんが、風邪をひいたのだと言う。大学に入ってからは初めての風邪らしい。それで、学校を休んで、家で療養しているそうだ。そして、小鳥ちゃんが風邪をひいたならば、何が何でもお見舞いに行かなくてはいけないのだと言う。

「どうして？」

「どうしてってそりゃ……ああ。小鳥ちゃん、知らないんだっけ？」

風子は、少し考えるように目を落とした。

「あのね、小鳥ちゃんは、守ってあげなきゃ死んじゃうんだよ」

「そうなの？」

「いや、そんなふうに思うというか」

「おせっかい」
「うるさいな。だから、行くよ」
　風子は、鞄を肩に掛けた。
「どこに」
「小鳥ちゃん家。学校から近いの」
「だって、会ったこともないのに行ってどうするの」
「荷物持ち」
　風子は、人差し指を突き付けて、漫画かアニメみたいなポーズをした。
「お見舞いなんだから、いろいろ買って行かなきゃでしょ」
「そんなに買う？」
「そんなに買う」
　すぐに、断る理由を捻りだそうとしたところ、風子はカフェオレの缶を持ちあげた。
　なるほど。只（タダ）より高いものはないと。
　私は、抵抗するのはやめて、同じく鞄を持ちあげた。
「よろしい」
　風子は満足そうに言い、くるりと背を向け、開けっ放しの教室のドアへ向かった。
　そういうわけで、風子と一緒に小鳥ちゃんの家に行くことになった。空き缶二つ持って、私と風子は、誰もいなくなった教室を後にした。
　小鳥ちゃんというのは、もちろん、あだ名だった。女の子で、小柄なんだろうと思ったら、むしろ背は高い方だと風子は話した。風子よりも三センチは高いらしい。それで、髪が長くて、梳かしきれないから、もしゃもしゃとしていて、色は白い方で、というのも外に出るのが億劫で、部屋にいることが多いからだそうだ。小鳥なら、外を駆けまわってそうだけれど、そうではないらしい。同じ学部だと言われたけれど、小鳥ちゃんというあだ名にも、彼女の本名にも、聞き覚えがなかった。最初のクラス分けで同じにならないと、まあ、そんなものだ。それに、専攻も違えば遭遇する機会はほとんど無い。風子は私と同じクラスだけれど、小鳥ちゃんとは、外国語のクラスでたまたま隣り合った席に座ったそうだ。それ以来、小鳥ちゃんのことをこうして気にかけてきたという。風子が言うところの「守ってあげなきゃ死んじゃう」という気を、小鳥ちゃんが起こさせるのだそうだ。もちろん、小鳥ちゃんのことは好きだよ、ということを前置きしたうえで彼女は言った。
「それで、小鳥ちゃんって呼び始めたの？」
「ううん。もう、そう呼ばれてたの。なんかね、小鳥ちゃん曰く、小学校からそのあだ名なんだって」
「小鳥ちゃんと言うか、雛ちゃんだね」
「それほど幼くはないよ」
「へえ」
「何よその顔」

「いや、重いなって」

苦し紛れに言う。風子が買ったお見舞いの品々は、私の両手にさがっていた。ポカリスエットの二リットルボトルが三本、林檎が一つ、バナナ一房、デラウェア一パック、レトルトのご飯を一袋。これが右手の袋の中身で、反対側は、小さいヨーグルト、アイス一箱、ゼリーが数種類、のど飴一袋、人参一袋、南瓜が半分、玉ねぎ二つ、もやし一袋、野菜ジュースのペットボトルとが入っていた。こんなに必要かという疑問が、更に重さを増やす。当の風子は、風邪薬を抱えていた。

私が何も言わないのに、何を察してか、風子は言い含めるように話す。

「いいの。私が小鳥ちゃんの看病するんだから」

この暑いのにこんなに持つはめになるとは思わなかった。五月の気候にしては、日差しが強く、風も穏やかだったので、暖められた空気が停滞して、どこもかしこも温くなっていた。普段、あまり汗をかかないのだけれど、今日ばかりは、額と背中と脇とにじんわりと滲む汗を感じる。それに、大学から近いという小鳥ちゃんのアパートは、スーパーからはそれほど近くないようで、アイスの箱がぐっしょりとしてきたのを見て、やっぱり買わない方がいいと言えば良かったと思った。物が無駄にされるのは、あんまり好きじゃない。大体、風子は車があるはずだ。そう言うと、彼女は何を馬鹿なことを、とでも言いたげな表情になった。

「だって、小鳥ちゃん家に駐車場ないもん」

「にしても、こんなに買う必要無かったよ。アイス溶けてるよ、きっと」

「もう見えてるから。ほら、あの紫っぽい建物」

風子が指さした先、ちょうど本屋の裏手に当たるだろうか、そこに、五階建てのアパートが見えた。ラベンダー色で、レンガ風の壁になっていて、わりと新しく建てられたもののようだ。いわゆる、いいところに住んでいる、というやつ。あと二、三分で着くだろう。アイスの命はないかもしれない。家に着いて湿った箱を開け、袋を開ける頃には、木の棒が沈んだ、ソーダ味の匂いがする水色の液体になっているはずだ。

「でもさ、アイス」

「じゃあ、食べていいよ」

風子は私の怒りに気付かないようで、さらっと返す。何というか、行動力はあるくせに、長女の気質なのか、のんびりしていて、物事に深く拘らない。

「小鳥ちゃん、あんまり出掛けないから、たまに買っていってあげるの」

「妻なの」

「まさか」

風子は目を丸くする。

「むしろ夫だよ」

「そっちじゃないよ」

「冗談だよ」
　風子は笑って、すぐにそれを引っ込めた。
「小鳥ちゃん、かわいい子なんだ」
　私には、小鳥ちゃんはただの無精者のイメージしかなかったので、それには同意はできなかったけれど、世話好きの風子と言えど、これだけ面倒を見ているのは、さすがに、異常事態かもしれない。
　今、その紫色のアパートはすぐそこにまで迫っていて、風子は、そのガラス張りのドアに手をかけた。小ぢんまりとした玄関は、オートロック式で、パスワードを入力しないと中に入れないタイプのものだ。風子は、勝手知ったるふうで、迷いなく数字のボタンを押す。すると、じーっと音がして、玄関ドアの鍵が解除された。
「慣れてるね」
　別に、からかうとか、変な意味を込めてではなく、私は言った。
「まあね。小鳥ちゃん、五階なんだ。エレベーターで行こう」
「うん。さっきのってさ、帰る時はボタン押したりしないよね」
　エレベーターに乗り込みながら、私が言うと、風子は怪訝そうな顔をした。
「うん。ドアの鍵を開ければ出られるよ。なんで？」
「だって、風子は看病してくるんでしょ。一人で帰らなきゃいけないからさ」
「え、一緒に看病してよ」
　風子は茶化すでもなく、真面目な顔をしていた。けれども、即座に反論した。
「それはおかしいでしょ」
「なんで？」
「だって、一回も会ったことないんだよ」
「大丈夫だよ。小鳥ちゃん気にしないから。それに、お見舞い客が多いと楽しいし」
　謎の自信を持って、風子は話す。私だったら、知らない人はおろか、友達に見舞われるのも嫌だ。けれど、この度も、風子の力押しに負けて、流れに呑まれてしまうかもしれない。
　五階に着いた。小鳥ちゃんは、一番端の五〇五号室に住んでいた。ドアは黒に近い紺色で、金の線で縁取られている。ネームプレートにはこの辺りの学生は皆そうしているように何も書いておらず、ただＮＨＫの受信シールが貼ってあった。私の家にはない。テレビがないので。
　風子は、チャイムを鳴らした。すると、物音がして、ドアが開く。小鳥ちゃんが出てきた。小鳥ちゃん。
「小鳥ちゃん元気？」
　小鳥ちゃんの髪は確かに長く、全体的にふわふわしているが、櫛を通してない感じが良く分かった。腰まであるし、染めていない。そして、確かに、思ったより背は高かった。青っぽい白の肌をしていた。銀縁の大きな丸眼鏡で、そのレンズやフレームの傷からして、何年も使っているものと思われる。それでも

って、五月にはふさわしくない濃い灰色の、足首まであるワンピースのような服を着ていた。多分、パジャマなのだろう。私は、とにかく、アイスを救って、さっさと帰りたかったが、小鳥ちゃんは、風子との話に頷いたり首を横に振ったりで、こっちのことは一度も見なかった。小鳥ちゃんの前髪は短く、白い額と、手入れしたようなしてないような細い眉、眼鏡の奥の眼は、隙のある長い睫毛に縁取られていて、濃い茶色だ。そして、全体的に手足と同じ白い顔なので、唇の赤いのが、目立つ。こうして見ていると、雛ちゃんと呼ぶには恐れ多いような気がして、小鳥ちゃんがぴったりだと、良く知りもしないのに考えてしまった。

「これ、荷物係の空(そら)くん」

風子の声で、小鳥ちゃんはこちらを向いた。

白目が桜色で、貝殻の裏側みたいだった。緊張しているのか、その目は、心持ち大きく、不安げに開かれていた。

「どうも」

私が軽く頭を下げると、小鳥ちゃんは、微かに応えた。その声に、私は思わず、小鳥ちゃんを凝視してしまった。

初対面なのに、なんとも不躾なことだったけれど、それだって仕方ないと思う。なんで風子は先に言ってくれなかったのか。風子は、帰り道に、言おうと思っていたけれど、タイミングを探してたと言い訳した。言ってくれれば——いや、もしかしたら、それでもまじまじと見つめてしまったかもしれない。

小鳥ちゃんは、微かでも、十分聞こえる声で、ぴい、と喋った。小鳥のように、鳴いたのだ。

小鳥ちゃんと言えど、部屋の中は藁でいっぱいだったなんてことはなく、至って人間の住む空間だった。台所には、整然と鍋やフライパンが掛かっており、冷蔵庫もあれば電子レンジもある。部屋は全体的に白く、ベッドと、勉強机があって、椅子は緑色。カーテンは白く、両脇にまとめてあって、下に向かって徐々に緑色になっている鳶模様のレースのカーテンが、開けた窓から入ってくる風に膨らんだり萎んだりしていた。本棚に並んだ本の背表紙や、壁に貼ってあるポストカードが、雑多な色を呈すほかは、白と緑でまとまった部屋だった。

風子と小鳥ちゃんの会話を、ただ流して聞くしかなかった私は、とりあえず、アイスを冷凍庫に入れた。箱は矢張り湿っていて、中のアイスは完全には溶けていないかもしれないが、形は崩れてきているだろう。冷凍庫の中でもう一度凍らせるしかない。それをそそくさ入れてしまうと他にすることも無く、二人を見る。風子がテーブルに風邪薬を置き、小鳥ちゃんがいやいやと首を振っていた。

「飲まなきゃ治らないの」

お母さんみたいに風子が言うと、小鳥ちゃんは項垂れてしまった。

「とにかく、今からご飯を作るから。食べたらお薬ね」

「お母さん」
　私が呼びかけると、風子と、それから小鳥ちゃんもこちらを見た。
「なにそれ、気持ち悪い」
「いや、小鳥ちゃんのお母さん、って意味だよ」
　小鳥ちゃんは、ぴいぴいと鳴いた。笑顔で、笑っているようだった。
「それで、なに？」
　面白いことに、風子はますます、不機嫌な時に声をかけられたお母さんのようだった。
「これ、どうする？　アイスはしまったよ」
「そんなにアイス好きなの？」
　風子は立ち上がりながら、そんな茶々を入れる。「今からしまいます」
「物を無駄にするのが嫌なの」
　同意なのか何なのか、小鳥ちゃんは、ぴ、と鳴いていた。
　風子が台所に来ると、邪魔だと邪険にされて、私は小鳥ちゃんの部屋へと足を踏み入れた。小鳥ちゃんは、不安そうではなかったけれど、その目を見開いているように見えた。物珍しいものを見るような、あるいは、観察しているような、そんな瞳だった。何を話して良いのか分からなくて、私はとりあえず、風子に、何を作るのか尋ねた。「雑炊」と風子は即答し、すっかり料理を作る頭になってしまっていた。風子も風子で人のことは言えず、集中すると、周りのことが目に入らない。
「雑炊だって。好き？」
　小鳥ちゃんに聞くと、彼女は頷いた。風子との会話を見た限りでは、小鳥ちゃんは、首を縦に振るか、横に振るか、傾げる。この三つの選択肢と、ぴいと鳴くことしかしていなかった。授業とか、どうしているんだろうと、失礼にも考えてしまう。そのとき小鳥ちゃんが立ち上がったので、まさか見透かされたのかと内心、びくりとしたが、彼女は机の方へ向かって、何やら取ってくると、また、元の位置に座る。白い、大きめのメモ帳と、ペンを二本手にしていた。ペンは、ピンクと青で、私の目の前にその二本を突き出し、短く囀り、首を傾げた。
「選べってこと」
　ぴ、と彼女は頷く。なので、青いボールペンを取る。それは、一つには、社会的な固定観念から。それから、こうやって色を選ぶときは、名前を意識して青を取ってしまう。
　小鳥ちゃんは、残されたピンクのマーカーペンで、きゅっきゅと文字を書いた。丁寧な文字で、やや小さい。メモ帳には、こう書かれていた。「今日はすみません。はじめまして、小鳥です。そう呼ばれてます。ふうちゃんにはいつもお世話になっています」
　私は、「私は、風子の友達です。空と呼んでください。急にお邪魔してすみませんでした。風子が、荷物係が必要だと言うので」と書いて渡す。渡しながら、これって自分は書く必要が

ないのではと思い当たったのだけれど、この際だから、相手の流儀に倣っておくことにした。風子は、私たちが無言であることに首を突っ込んでこなかった。台所からは、小気味良い包丁の音がした。私と小鳥ちゃんは、少なくとも私は、会話が成立したことで、静かな満足感を得ていた。

「いつから風邪をひいているんですか」

私が、無難な話題を書くと、彼女はさらさらと答えた。「先週の月曜日からです。日曜日に、午後から雨だったから」

小鳥ちゃんは、慣れているらしく、端正な字を素早く書いた。私は、そのピンクの字の下に、中心線が常に傾いているような哀れな字を連ねた。

「出掛けたんですか？」

「はい。でも、傘を持っていくのを忘れて、図書館を出たら雨だったんです。最初は小雨だったから、走って帰ればいいと思って。それで、走って行ったら、あの、池の前に芝生があるところ、わかりますか？」

小鳥ちゃんが、手を止めてこちらを見た。私は頷いた。ぴいと、安心したように、小鳥ちゃんは鳴く。

「そこに、雨なのに、人がいたんです。それも寝そべっていて。それで、つい、立ち止まってしまって。何をしてるのかなって」

気になるでしょ、とでもいうように小鳥ちゃんは期待を込めた眼差しを向ける。私も気にはなるが、流石に立ち止まりはしないだろうと思いながら、「それで、どうしたんですか？」と書いた。

「声をかけたんです。でも、こっちのことは全然見なくて。寝てるのかと思って近づいたら、ただ、上を見ていたんです。それで、何をするのかなと思って、近くに座っていたんです。何にもしなかったんですけど。ちょっとお喋りしました」

そこで、小鳥ちゃんは、ペンを止めた。ピンクが紙に滲む。

「空を、見ていたいそうなんです」

そう書いて、小鳥ちゃんはまたペンを止めて、逡巡して、再び書き始める。「だから、勝手に空さんって呼んでいたんです。あなたが来て、空だってふうちゃんが言うから、まさかと思いました。でも、違いますよね？」

小鳥ちゃんが、あの、こちらを窺う、見開いたような目で見ていた。じらしたって仕方ない。私は首を振って、すぐに返答した。「はい、違います」すると、小鳥ちゃんは可笑しそうに囀った。「そうですよね。やっぱり。もしかしたらと思って、つい、聞いちゃったんです」

小鳥ちゃんは、囀り、どうやら、この質問で彼女の緊張の糸が途切れたようだった。私まで、何だか心が軽くなって、何か聞きたいわけでもないのにメモ帳にペンをのばしたところ、風子が台所から戻ってきた。

「できたよ」

ぴいぴいと小鳥ちゃんが鳴いた。風子は、テーブルにトレーを置いた。雑炊は、水玉模様の白いお茶碗に盛られて、相性は

ともかく、ポカリスエットのグラスが付いていた。
「なに、小鳥ちゃんが風邪をひいた話でもしてたの？」
察しのいい風子は、早速言い当てた。小鳥ちゃんは、雑炊を食べながら頷く。
「小鳥ちゃんも馬鹿なんだから。風邪ひくかもしれないでしょ、そんなことしたら」
「面白い子だね、小鳥ちゃん」
そう言うと、風子は、じっと私を見つめた。
「空じゃないかと思ったんだよね、最初は」
「何が」
「芝生に寝てたって人。だって、してそうじゃない」
「しないよ」
それから風子は、美味しそうにご飯を食べている小鳥ちゃんに、食べ終わったらお薬ね、と釘をさした。

その日、格闘の末、小鳥ちゃんはお薬を飲み、風子も安心して、五時頃に、私たちは小鳥ちゃんの家を後にした。風子は六時からアルバイトがあるのだ。駅に近い学習塾。私は、不定期に短期のバイトをするくらいで、風子のそのバイタリティが眩しい。
バス停まで歩きがてら話したけれど、風子はまず、一番最初に、謝った。
「ごめんね、話さなくて」
私は、別にいいよ、としか言えず、風子は、少しだけ居心地が悪そうだった。
「小鳥ちゃん、小学生の時から、ずっと、小鳥ちゃんなんだって」
「それで、そういうあだ名なんだ」
「そう」
風子は、まくっていた袖を下ろした。夕方になり、涼しい風が吹き始めていた。
「守ってあげなきゃ死んじゃうの」
「そうかな。わりに、強い人だと思ったけど、何となく」
そうでもなければ、雨の中じっとしていられないだろうし。何しろ、あの彼女流の生き方を、小学生の時から今まで続けてきたことに感服しそうだ。
「でも、小鳥ちゃんの基準というか、境界と言うかさ、現実離れしてて、すぐぐちゃぐちゃにされちゃいそうで、怖いんだよ」
風子は、自信のなさそうに喋った。
「それはそれだと思うけどな」
「空はそうかもね」
知ったように、風子は言った。
「空も小鳥ちゃんに近いけど、でも、空は壊されはしないよ」
「ありがとう。褒めてはないだろうけど」
「うん」
と、風子は押し黙る。何か言いたげな雰囲気を醸しながら。
「だからね」

ほら、きた。
「応援してあげたいじゃない」
あまりに飛躍していたので、私は、思わず聞き返していた。
風子は、すると、照れたのか、早口でまくしたてた。
「だから、小鳥ちゃんが好きな人ができたんならさ、怖いけど応援してあげたくなるでしょ」
「好きな人って？」
「馬鹿。芝生の人だよ」
一瞬考えて、一瞬で答えを出した。
「そういう話じゃないだろ」
「そうでしょ」
「違うだろ。悪いこと言わないからさ、国語の先生になるのやめた方が良いよ」
「馬鹿。そうだって。あたしが何年小鳥ちゃんと一緒にいると思ってんの」
「二年と一カ月」
「そうだよ」
風子は、言葉に詰まった。
「だからさ。知らないかなって思ったの」
「何を」
「その芝生の人。知ってそうだから、空」
「人を変人扱いするな」
「間違ってないでしょ」
風子はにべもない。バス停に着き、彼女は最後にこう言った。
「もしさ、芝生の人を見たら、教えてほしいの」
そして、とどめのつもりか、外国語の別れの言葉みたいに、オッフェという言葉を口にした。そんなことに協力する義務はないと思ったものの、断る理由も探せなくて、見たらね、と彼女に返した。

その日、家に帰りがてら例の芝生の前を通ってみたけれど、もちろん、芝生の人なんていなかった。それからは、意識して芝生に注意を向けるようにしてみたけれど、流石に寝そべっているような人は見当たらない。昼食を食べているか、誰かと話しているか、ぼーっとしているか、本を呼んでいるか、大体そのどれかだ。小鳥ちゃんは雨の日に出会ったというから、もしかしたら、雨の日だけ芝生に現れるのかもしれないけれど、そんな天気の日に、わざわざ芝生まで行く気は起こらなかった。それに、そのとき私は、いかに自分から言葉を守るかに集中していた。事は深刻だった。今まで、難なく使っていた言葉が、何の影響か、自分の中で勝手に成長して、傍から見れば、奇抜な果実になってしまう。おお、ロミオ、ロミオ。ここに一本の薔薇があるとして、私はそれを人々が何と呼んでいるかは、この花を見て、その名を口にしようとするまで知っていた。けれど、名前を言おうとしたその瞬間、「薔薇」は消滅する。「薔薇」と言う文字から、私の薔薇に対する印象が、心象が、感傷が、

溢れ出てきて、それは的確な言葉で以て語る前に流れ出て、私を満たしてしまい、私に「ビロード」とか「びらびら」とか「クーベルチュールチョコレート」などという言葉を吐かせたり、「び」とか「ろ」とか「ざ」という文字しか思いつかせてくれない。脳を検索すると、イメージばかりがヒットして、肝心の語句を霞ませてしまうのだ。一人ならそれでも何とかなる。けれども、人と繋がるには、同じ言葉が必要だ。オッフェではカフェオレは飲めない。クーベルチュールチョコレートはクーベルチュールチョコレートで、薔薇ではない。段々に、私も余裕ではいられなくなってきたのだった。

だからかもしれないが、急に、電光がはしるみたいに、日常の折々で、小鳥ちゃんに会いたくなることがあった。小鳥ちゃんが、共有する言葉を発さずにいるのに、あんなに自由に見えるのは、どうしてなのか、次第に謎になっていったのだ。小鳥ちゃんのアパートは分かっているけれど、まさか押しかけるなんてできず、だからといって、学校で会えるかと言えば、今まで授業がかぶらなかったのだから、どちらかが変則的に行動しなければ無理だ。風子に頼めば何とかなるかもしれないけれど、それも何だか。あの風子の読解力で、変な読みをされたら小鳥ちゃんに迷惑だろうと思うと、何にもできないのだった。

そして、堂々巡りの果てに、私は芝生へと舞い戻る。例の芝生の人が見つかれば小鳥ちゃんに会う口実ができることに気がついたのだ。

もちろん、そんなふうに思ってみたからと言って、発見できるわけでもなく、ぐるぐる悩んでいるうちに、月日は流れ、もう六月になっていた。私は、小鳥ちゃんに一度会ったきり、三週間も彼女を見ていない。風子とは、同じ授業を受けているので、週に一度は会っている。風子は、小鳥ちゃんのことでは、風邪が治ったということを伝えたきりで、芝生の人探索は音沙汰ない。もしかしたら、風子の中では、既に終わった出来事なのではと、その日。水曜日の三限終了後。彼女の席に行って、声をかけようかと思ったが、風子は、授業後、さっさと教室を出てしまって、その隙さえなかった。

何も上手く進まず、遣る瀬無くなって、帰って不貞寝してやろうかと思いながら腰をあげたところ、頬に冷たい衝撃があった。

「ほら、オッフェ」

「忘れろ」

風子だった。彼女は、カフェオレの缶を片手に、もう片方にはグレープフルーツジュースを持っていて、カフェオレで私の頬に攻撃していた。

「ねえ。気になってたんだけど、何でオッフェなの？」

「訊くなよ。こっちだって分からないんだから」

私は、良く冷えた缶を手で押しよけた。

「何かと混ざったんじゃない？　カフェとか。あ、キャッフェ、みたいなさ」

「知らないよ」
　不当に、馬鹿にされている気がして、その次の風子の言葉がなかったら、迷うことなく教室を出ていっていた。
「今日、小鳥ちゃん家に来ない？」
「何だよ、急に」
　そして、その突然の誘いは、好都合なだけに、無性に悪い知らせな気がした。
「また風邪なの」
　用心して、カフェオレを受け取らないでいると、彼女は缶を机の上に置いた。
「もっとひどいよ。喋んなくなっちゃったの、小鳥ちゃん」
　やっぱり、悪い知らせだった。それも、予想していない内容で。
「どうして」
「分かってたら、こっちだって対処のしようがあるけどさ」
　拗ねたように、風子は缶のプルトップを開ける。苦みを持ったグレープフルーツの匂いが、こちらまで漂ってきた。今日の教室は、休み時間だというのにがやがやとうるさい。最後に先生が出した課題のことで、皆話しあっているようだった。
「なんかさ、この間、芝生の人に会えたみたいなんだけど、それからしばらくして、喋らなくなったの」
　風子は、眉を顰めた。
「何かあったのかなって思ったんだけど。でも、今までね、どんなに嫌なことがあっても、喋らなくなることはなかったんだよ。小鳥ちゃん、小鳥ちゃんの言葉しか喋らないから、色々言われることはあったけど、でも、私と二人きりとか、友達の前でまで話さないことはなかったもん」
「いつからそうなったの？」
「一週間前、かなあ。大体」
　風子は、カフェオレを取った。
「飲むの？」
「飲むよ」
　私は受け取って、缶を開けた。
「ありがと。良かった。何か、私だけじゃ心もとなくてさ」
　風子は少し微笑んで、それから考えるように視線を上にやる。
「小鳥ちゃん、今日は学校来てるの。四限までだから、その後会おう。私、友達と英語の授業の資料作る約束しちゃってて。だから、その後、小鳥ちゃん迎えに行くよ。えっと、芝生で会うことにしよう」
　急いでいたのか、そう言うと、風子は教室から出ていった。
　カフェオレを、一人で、教室で飲むのも味気ないし寂しいので、とりあえず、教室を出てみた。
　小鳥ちゃんが喋らなくなった、というのは私にとっても大事件だった。小鳥ちゃんが、それでも自分の言葉を喋りつづけていたことは、私にも、無視できないことだった。言わば、支えのような。誇り、とまで言うと言いすぎかもしれないけれど。
　それから、あの芝生の人に会ったというのも、気になる。その

人と小鳥ちゃんはお話ししたらしいが、一体、何を話したのだろうか。

　カフェオレを飲みながら、何気なく歩を進め、校内にいる意味も無かったので、外に出る。すると、六月にしては、からりと晴れた空が広がっていた。淡い水色で、薄く伸びた雲がところどころに掛かり、日差しはそれなりだったが、暑さを我慢すれば良い日和と言えた。これなら、カフェオレを飲みながらあの芝生で待っていても悪くない。そう思って、私は池まで歩いていった。歩きながら、今日の空は、カフェオレに似ていなくもないと思った。色が均一に混ざって、それが、引き伸ばされていて。カフェオレも、その混ざり具合の斑の無さが、なんだか空に似ている。自然の物にも、人工的な不健全さがある。人間の想像する自然の方が、大人しくて、かわいらしくて、驚くほど。すかっと晴れた青空の一定の濃さとか、水平線の交わらなさとか、太陽の光もそうだ。その作り物っぽさに、その容赦のなさに、眩暈がする。その辺りに自生している植物も、その葉や枝の生え方から、葉脈の通り方、その規則的な作りに気を取られると、少し気分が悪くなる。数学を美しいと思えないのも、きっと、その所為。私は、数学と科学とで織りなす世界がどうにも悪趣味に思えて、私が生まれるはるか以前の人々が残した書物に残る、自然の姿にばかり浸ってしまう。その眼が欲しい。あの、むせかえるような生命の匂いを、それを発する図式、数式を、溶かして、曖昧にして、美しい、美しいものが見たい。

　不意に、小鳥ちゃんが現れる。小鳥ちゃん。どうして、喋らなくなってしまったのだろう。

　私は、足を止めた。芝生だ。この天気なので、芝生には何人か先客がいた。池の側で話し合っている二人組と、遠く木陰で本を読んでいる者と、そして、そこに。芝生の上に寝転んで、まっすぐ上を見上げている男がいた。

　こいつだ。

　私は、味も分からずカフェオレを飲み、飲み干すと、その男に近寄った。男は微動だにしなかった。寝てるのかとも思ったが、その目は開いていて、瞬きもさしてせずに、上を見ていた。

　話しかけるのは躊躇われた。自分と同じくらいの体格で、髪の色が、黒のようだがやや青っぽく見える。染めているのか、良く分からない。丈の長い、だぼだぼした生成りの服に、カーキ色のズボンを履いていた。足はサンダルだった。こんな服を着た人と、あまり、話したことがなく、それで何を話したらよいのかと困ったのだけれど、結局、どうにもやりきれなくて、声をかけた。

「あの」

　それ一言。男は矢張り、微動だにしなかった。無視をされても、こちらは、一度喋ってしまうと何かが取っ払われて、続けざまに話していた。

「何見てるんですか」

「空」

男は、こちらには目もくれずに、空を見上げていた。
どうして、と聞こうとして、自分が馬鹿なことを聞こうとしているような気がした。誰が何を見ようと、それが何だと言うのだろう。
でも、このとき、私には小鳥ちゃんという小さなとっかかりがあって、それがこの場所から私を動かさない。膠着状態。すると男が、先に口を開いた。
「空が好き」
それは、私に向かって尋ねているらしかった。私にとって、その言葉は二重の意味を含んでいたが、もちろん、一般的に受け取って、答える。
「それは」
「今日の空はどう」
何を言ったら話を聞いてもらえるか、考えを巡らせて、結局、カフェオレに戻った。
「カフェオレみたいだと」
「ああ、へえ」
分かっているのかどうか、分からせないような相槌を打つ。
「今日のような空は好きだけど、でも、冬の空が一番いい」
「どうしてですか」
「見ていて気分が良いから」
当然だと言わんばかりに彼は言った。
「空が、あの色をさ、インクみたいに落としてくれたら、この目が空になるんだよ」
そんなことは起こりませんよ、とは言えなくて、私は、曖昧に返事をした。
「そうしたらきれいになるよ。体の中が。泣いた後みたいに」
「きれいに」
「きれいに。だってさ。気持ち悪いんだ。体が。心臓は脈を打つ。絶え間なく呼吸して、お腹が空いたりなんだり、生きるってのは、自分じゃどうしようもない何かに、生きる方向に動かされてるんだよ。今、走りたいと思って走るのも寝たいと思って眠るのも、太陽が昇れば目覚めて、沈めば眠くなるのがまさにそうで、生きる方へ生きる方へ無理矢理に突き動かされているんだよ。それが嫌だ。生まれてここにいるっていうのがもう耐えられない。嫌なんだよ。生まれないでここにいたい。あの空になりたいよ。あんな風に、きれいになりたい。だから、空の眼が欲しい。でも、欲しいなんて思うことこそ、生きていることの証明なのかもしれない。だから、ここに、こうしているんだよ」
ふう、と彼はため息を吐いた。それが、疲れたようだったので、謝ると、いいんだと彼は微笑んだ。
「カフェオレは、近いと思うし」
私は、何だか、この暖かい陽気なのに、暑さを感じず、変な心地がしてきて、早くここから離れたいような気分だった。だから、この人が大学生かどうかとか、普段何をしている人なのかとか、何も聞きたくなくて、核心の小鳥ちゃんのことを最後

に聞いておこうと思い、再び、話しかけた。
「小鳥ちゃんが、来ませんでしたか？　あなたに二回会ったと思うんですが」
ああ、と、彼は思い当たるようだった。
「会った。でも三回だ。あの子は、空の眼を持っていないくせに、持っているふりをしている。偽物は嫌いだ」
心臓が、きゅっと締め付けられた。
「そう言ったんですか」
「言ったよ」
男の声の調子は、全くぶれない。
「そう。だから、自分も嫌いだよ」
私は、何も言わず、ただ、踵を返してその場を離れた。早足で、一刻も早く離れようと思った。だけれど、何も言わないではいられなくて、くるっと向きを変えると、男の方へ戻った。
「私はそうは思わない」
男は何も言わなかった。
「空が何だ。そんな眼の人間なんていない。小鳥ちゃんは小鳥ちゃんの眼なんだ」
男は黙っていて、そして、絞り出すような、微かな声を出した。
「もう、ほっといてくれよ」
「ごめん」
私はそう言って、今度こそその場を離れた。もう、あの男を見かけても、きっと、二度と目に入らない。空の眼なんてどこにもない。それを探して、探し続けるよりは――私は、小鳥ちゃんに会いたくて仕方がなかった。
風子の言うとおり、私の視界は狭い。見たいものしか見えず、見えないものは気付くまで見られない。今は、小鳥ちゃんが見えている。小鳥ちゃんと話がしたい。小鳥ちゃんの見えるもの、その眼で、見えるもの、感じるもの、それを話してほしい。空の眼、空の眼は、なんて素敵な響きだろう。私だって、そうしたかった。空の眼があれば、世界はなんて、素敵に、映るだろう。生まれないで、ここにいたならば、どんなに晴れ晴れとしただろう。でも今は、小鳥ちゃん、あなたに会いたい。小鳥ちゃんの眼で捉えるものを逐一教えてください。喋りたくないかもしれないけど、でもあなたは、そんなに弱くないはずだ。私も私の眼で見えるものを、思いつくままに話すから。そうして、その交わらない平行線が、いつか寄り添っていけたら。それは、空の眼に、勝るとも劣らない、奇跡だ。
私は、走っていた。カフェオレの缶は、とっくにどこかへいっていた。体が覚束ない。背負っているはずの鞄が感じられなかった。失くしたのかもしれない。でも、それだって良かった。ひたすら、小鳥ちゃんに会いに。どこにいるのか分からない、小鳥ちゃんに会いに。